

平成 26 年度第 2 回 CCC 体育学グループ運営委員会 議事概要

I. 日 時：平成 26 年 8 月 2 日（土）16:00～18:30

II. 場 所：私立大学情報協会 事務局 会議室

III. 出席者：大橋委員、田附委員、來田委員、内山委員
井端事務局長、野本係長

IV. 資 料

① 到達目標の一部を実現するための教育改善モデル（前回の変更点含む）

参考 0 スポーツ 社会を変える ウィルフリード・レムケ氏（読売新聞）

参考 1 アクティブ・ラーニングの実質化に向けて

参考 2 「まなぶ」から「できる」へ 経営科目のアクティブ・ラーニング

・ICT を活用した教育改善モデルの考察（体育分野）

・平成 26 年度 CCC 体育学グループ運営委員会名簿

・前回議事概要

V. 議事内容

1. 前回議事概要の確認

前回議事概要及び記録内容に不備があったことから、修正し、再度配布することとなった。

2. 議事内容

達成目標 4「身体文化としてのスポーツが持つ社会的機能について理解し、多文化・多様性を尊重する社会の発展に貢献できる」の一部を実現するための教育改善モデルの検討

(1) 前回の議事内容の確認と合わせて、「到達目標 4」の記載内容、「コア・カリキュラムのイメージ」「到達度」の検討と修正がなされた。

・「コア・カリキュラムのイメージ」について、スポーツや体育の分野に特化する以前に、基礎となる内容（学問領域）の学修が必要であることが指摘された。

・スポーツの中核となる価値を「卓越性」「相互理解」「尊重」と位置づけたプログラム(IOC)の中にアクティブ・ラーニングが多く取り入れられているので、参考になるのではないかと。

・2020 年に向けてもオリンピック教育で扱うような内容を入れてはどうか。

・「国際関係論」や「国際スポーツ論」では、扱う内容を的確に示すために「国際社会とスポーツ」とすることとなった。

・近年注目されつつあるアダプテッド・スポーツの重要性などが示唆された。

議論の結果、以下の通り修正された（下線部は修正された箇所を示す）。

[前回までの内容]

スポーツ哲学、スポーツ倫理、スポーツ法規、国際スポーツ論、スポーツサービス論、スポーツイベント論、アダプテッド・スポーツ論、スポーツマネジメント論など

[修正後]

スポーツ原理・哲学、スポーツ倫理、スポーツ法学、国際社会とスポーツ、アダプテッド・スポーツ、スポーツマネジメントなど

(2) 達成目標 4 の一部を実現するための教育改善モデルの検討

① 「2 改善モデルの授業デザイン_2.1 授業のねらい」について

前回までの内容を吟味した。

- ・「平和」や「豊か」という言葉そのものが、宗教などによっても異なるため注意が必要である。
- ・国際社会の「安寧」という文言ではどうか。
- ・高尚で広義な表現から分かりやすい表現となるよう修正された（下線部は修正された箇所を示す）。

[前回までの内容]

これまでの体育学分野の授業では、人種・言語・宗教・文化などの異なる多様な人々との相互理解に結びつくスポーツの機能について理解し、社会の課題解決に活かすことを理論的・実践的に学修することが十分ではなかった。

ここでは、国際社会の中で、思想・歴史・文化など幅広い教養と豊かな見識を持ち、計画的・戦略的なスポーツプログラムの企画・立案や実践を通じて、さまざまな社会の課題に取り組む能力を身につけることを目指す。

[修正後]

これまでの体育学分野の授業では、人種・言語・宗教・文化などの異なる多様な人々との相互理解に結びつくスポーツの社会的価値について理解し、社会の課題解決に結びつけて学修することが十分ではなかった。

ここでは、国際社会の中で思想・歴史・文化など幅広い教養と豊かな見識を持ち、計画的・戦略的なスポーツプログラムの企画・立案や実践を通じて、さまざまな社会の課題に取り組む能力を身につけることを目指す。

(2) 「2.2 授業の仕組み」について

前回までの内容にもとづき検討がなされた。

- ・体育やスポーツに特化した学修を行う前に、基本的な教養、国際関係、国際協力、異文化理解に関わる内容を身につけておく必要がある。
- ・授業の仕組みとして、社会や他大学とも協力し、カリキュラムを進める必要がある。

その結果、以下の通り、修正された（下線部は修正された箇所を示す）。なお、ICT の利用などについては、「2.4 授業に ICT を活用した学習内容・方法」などの項で記載することとなった。

[前回までの内容]

ここでは、卒業までの学修期間を想定しており、ある特定年次を想定したものではない。国際社会の一員として基本となるコミュニケーション力（英語力）はもとより、「スポーツ」の企画力や実践力を身につけるためには、ICT やポートフォリオを用いた学修記録のほか、実際の活動現場の見学や企画への参画を経て、実際に企画運営を行うなど、段階的、発展的に履修が進むようなカリキュラムと支援体制が必要である。

[修正後]

ここでは、卒業までの学修期間を想定しており、ある特定年次を想定したものではない。国際社会の一員として基本となる教養はもとより、国際関係や国際協力、異文化理解に関わる分野の学修が前提となる。そのため、社会や他大学との連携によるカリキュラムと支援体制が必要である。

(3) 「2.3 授業に ICT を活用したシナリオ」について

シナリオとして、授業の段階や発展性に配慮し、情報の収集から、実際のフィールドワークに至る過程を示すこととなった。

- ・地域社会及び海外の学生などとディスカッションすることなども可能な例を提示する。

その結果、以下の通りの内容となった。

- ① スポーツを通じた国際協力、異文化理解の現状について情報収集・整理させる。
- ② スポーツの社会的価値について学修支援システムを通じてグループ討論させ、フィールドワークの企画案を構築させる。
- ③ 討議プロセスと企画案を学修支援システム上で発表させ、相互評価を通じて振り返りさせる。
- ④ 企画案に基づきフィールドワークさせる。
- ⑤ 実践の学修成果を相互評価させる。

2. 今後の進め方

「2.4」「2.5」「2.6」「3.」「4.」の項目については、次回の会議までに、内山委員が各委員からの意見を取りまとめ、それを資料とし検討することとなった。

3. その他

次回の運営委員会は、平成26年10月31日（金）16:00～を第一候補日として、各委員と調整する旨、確認された。

（文責 内山秀一）